

まほらいな市民大学の様子

令和5年4月20日（木）

『 ツキノワグマの生態と対策 』

講師 NPO 法人信州ツキノワグマ研究会 瀧井 暁子 氏・岸元 良輔 氏



長年研究をされている瀧井氏・岸元氏から、ツキノワグマや森林に住む動物の生態と対策について、調査データをもとに話がありました。会場には、クマの食べたものの標本、頭骨や毛皮、足の爪などの実物が展示され、間近で見学することができました。

瀧井氏の話では、世界にはクマが8種類いて、歯で年齢がわかること。主に植物を食べていて、夏後半から秋前半にかけての食料の端境期にクマが出没しやすいこと。12月中旬から4月中旬は冬眠期であること。クマの臭覚は犬よりもすぐれていて、上高地では残飯に餌付いてしまったクマがいたこと。「クマの出没を抑制するためには、人の食べ物や農作物（トウモロコシ、果樹）、養蜂箱、養魚場、生ゴミといった誘因物の対策や被害発生前に電気柵を設置する対策、クマの滞在しやすい見通しの悪い森林や藪の整備」などがあること。また、クマは臆病で人と出会いたくないと思っているが、「もしクマと出会ってしまったら、落ち着く、ゆっくり後ずさりする。」「クマが襲ってきたら、うつぶせになる。首の後ろに手を組む。死んだふりはダメ。」予防対策として「クマの出やすい場所を意識し、音の鳴るもの（鈴やラジオ）やクマスプレーを持つ」といった話がありました。

岸元氏からは、長野県の農業・林業被害（ニホンジカが一番多い）、長野県の有害鳥獣捕獲数（ニホンジカ、イノシシが多い）、ツキノワグマの捕獲数と被害対策について話がありました。最後に「豊かな自然があるのでクマが生息している」とまとめがありました。

学生からは、「体系的に話を聴けて、クマに対する知見が深まりました。」「クマの生態を知るとは事故対策にもつながるので学べてよかった。」「エサを放置するといった人間の責任も多分にあることがわかった。誘因物対策。緩衝帯の整備。」「豊かな大自然を守って、クマと人が安心して共存できる環境づくりが大事だと思った。」「クマの出やすい地域に住んでいるので、犬の散歩や畑仕事に鈴を持つようにしたい。」といった感想がありました。